

# 今川家臣団崩壊過程の一齣

—「遠州念劇」をめぐる—

A Part of the Process of Collapse in the Imagawas' Vassals:

In connection with "Enshu-sôgeki"

小和田哲男

Tetsuo Owada

(昭和六十三年十月十一日受理)

はじめに

永祿三年（一五六〇）五月一九日、今川義元は織田信長のために討たれた。一人の武将の死が、全盛を誇っていた戦国大名家を滅亡に導くという例は、たしかにいくつもあるが、この今川義元のケースは、その最も典型的なものというであろう。

具体的には、義元の死後、まず、三河において今川領から離脱しようという動きがおこる。当時、今川氏の側では、それを「三州錯乱」などと表現しているが、義元の子氏真にしてみれば、まさに「錯乱」の語がぴったりであった。

三州錯乱の張本人はいうまでもなく松平元康である。元康は、「松平中心史観」あるいは「神君史観」とでもいいうる近世成立の史書によれば、氏真に弔い合戦を勧めたが、氏真の側にその気が全く無く、しかたなしに織田信長からの呼びかけに応じたとする。結局、元康と信長の同盟により、松平氏は今川氏の手を離れ、三河の諸将は、元康の動きをにらみながら、それに同調する者が多く出、そのため、氏真にしてみれば、

ば、元康の離反によって三河が蚕食された形となったわけである。

元康は、信長の支援を得ながら、遠江の今川方諸将にも働きかけをはじめた。もちろん、元康だけでなく、武田信玄も、すぐ隣りの信濃側から働きかけはじめており、遠江諸将の中にも動揺が生まれてきた。元康の働きかけになるものとしては、井伊谷（静岡県引佐郡引佐町井伊谷）の井伊氏などはその早い例ではなからうか。

井伊谷城の城主井伊直盛は、永祿三年の桶狭間の戦いするとき、義元とともに討死している。そのあとを嗣いだのが直親であるが、永祿五年（一五六二）、「直親が元康と結んで今川家に叛こうとしている」という噂をキャッチした氏真は、直親を駿府に召喚し、その噂の実否を糾そうとした。

直親がどの程度まで元康の働きかけをうけ、離反の気持があったのか明らかではないが、申し開きのため、駿府へ登城するため、東海道を東へ下った。ところが、掛川城に到着したところで、有無をいわず朝比奈泰朝に殺されてしまったのである。今川家の老臣朝比奈泰朝は、遠江諸將の動揺を抑えるため、いわばみせしめとして直親を殺したもので

あろう。ちなみに、のち、この直親の遺児が家康に見い出されたが、これがいわゆる「徳川四天王」の一人に数えられた井伊直政である。

しかし、こうしたみせしめにもかかわらず、今川氏の手を離れようとする家臣は多く、やがて、氏真自身、「遠州錯乱」、さらには「遠州念劇」とよぶ事態が生まれてきたのである。

では、「遠州念劇」とはどのような状況をいったものであろうか。総括的なものとしては、「浜松御在城記」の記述が比較的良好とまattering。すなわち、

一、遠州引間ノ城主飯尾豊前守ハ駿州今川ノ先鋒（鋒）トシテ、尾州織田軍勢ト所々ニテ合戦、然ニ永禄三年（五月脱）十九日、藝元、尾州桶狭間ニテ討死ノ後、氏真、亡父ノ弔合戦之心掛モ無之、朝夕酒宴遊興ニ長ラル、故、権現様、永禄四年ヨリ信長公ト御和睦被成候、（自是ハ今川ト味）遠州引間ノ城主飯尾豊前守・同国井伊合ノ城主井伊肥後守・同国高山ノ城主奥村修理ヲ始、大方氏真ヲ叛キ、信長公及権現様江内通仕候、此由氏真聞及、永禄五年三月ハ井伊合、同年四月ハ引間、同七月ハ高山、此三城ハ駿河ヨリ人数ヲ差向被攻候、井伊谷・高山ハ落去、引間ノ城ニテハ、寄手ノ大將新野左馬助討死、城内ニモ、飯尾同心渥美・森川・内田等ノ歴々討死仕候得共、猶堅固ニ守ニ依テ、氏真、調略ヲ以テ、致和談候、此以後永禄七甲子、氏真三州江発向、権現様ト所々ニテ攻合、同国一ノ宮ヨリ人数ヲ引取被申候刻、飯尾ハ権現様江御味方ノ跡相見候ニツキ、氏真ヨリ遠州二俣ノ城主松井左衛門（初強ハト）豊前守姉婿ナルニヨリ、渠ヲ媒トシテ縁ニ取クミ、駿府江呼奇、永禄八年極月廿日、駿府二ノ丸飯尾屋敷江押詰、被誅之、然共引間城ハ豊前守家臣江間安基守・同加賀守持固候故、翌年二月、権現様より御慰之御書被下候由、  
というものである。

たしかに、「遠州念劇」とよばれる大筋はこの通りであった。しかし、年次などに不正確なところも多くみられることも事実である。したがって、本稿では、関連史料によって、「遠州念劇」の事実関係をあとづける作業をしたい。この作業を通して、今川家臣団、特に遠江におけるその崩壊過程を明らかにしたいと考えている。

註(1) 永禄八年（一五六五）十月七日付「成瀬文書」（『静岡県史料』第五輯、一五四ページ）に、「去々年以来遠州念劇」とみえるので、今川方では永禄六年から「遠州念劇」がはじまったと認識していたことがわかる。

(2) 延宝末から天和年間にかけて浜松藩士永井随庵が著わしたものとされている。本稿では、内閣文庫本を底本とした『浜松市史』資料編一所収本によった。同書五〇六ページ。

## 一、遠州諸將の離反

永禄七年（一五六四）五月九日、今川氏真は天宮神社の神主中村大膳亮に、「今度遠州之輩企逆心之条、弥国家安泰の祈念可致」きよう命じているが、このとき、逆心を企てた今川方の部将とはどのような人々だったであろうか。

「浜松御在城記」では、引間城主の飯尾豊前守、井伊谷城主の井伊肥後守の二人しかあげていないが、この二人だけなのであろうか。

一つ史料的に明らかなのは、永禄六年十二月から閏十二月にかけて、引間近くの飯田（浜松市飯田町）で合戦がくりひろげられていることである。たとえば、

今度於飯田口合戦之時、致二太刀打、抽二軍中、頭一討捕之旨神妙ニ

一九

天野景貞・七郎父子ということになる。この天野氏は、武田信玄からの内応工作によって今川氏を叛いたものである。北遠は地理的に信濃に近いということもあって、武田氏の影響をうけ、西遠は三河に隣接し、松平氏からの誘いかけがあったわけである。したがって、「遠州念劇」は、今川氏の弱体化した様子をねらった武田・松平両氏によって攪乱された結果、惹きおこされた事態であったということが出来る。

それともう一人は、中遠の堀越氏である。堀越氏は、現在の袋井市堀越を苗字の地とするもので、今川了俊の末裔である。堀越貞基のとき、天文五年（一五三六）にも、今川氏輝から義元への代替りのとき宗家に敵対し、一度は帰順していたが、再び永禄六年（一五六三）、その子氏延のときに、宗家の今川氏真を叛いている。『今川家譜』は、堀越氏延の謀反について、裏で糸を引いていたのは武田信玄だとする。すなわち武田信玄ハ、「堀越六郎ハ今川家ノ一門ニテ了俊家ナレハ、忽キ謀反ヲ起シ、駿河ヘ攻入玉ヘ、此方ヨリ手ヲ合せ、人数ヲ遣シ、両方ヨリ攻寄、御館ヲ其方ニ遣シ、今川ノ家督を可遣」ト偽テスカシケレハ、堀越思慮ナキ人ニテ、引馬ノ飯尾豊前守ヲ語ヒ、永禄六年ニ逆心ヲ起シ、近辺ノ地待ヲ勤ケル、此由聞ヘシカハ、氏真公不日ニ出張シ玉ヒ、飯尾方ヘハ新野左馬助・朝比奈備中守ヲ差遣シ、堀越六郎ヲハ向坂六右衛門、糠谷但馬守・大原肥前守・三浦左衛門尉ヲ指回攻ラルル、兩人共ニ防戦不叶自害シテ果ケレハ、残党悉打取城ニ火ヲカケ焼去ル、然共味方新野左馬助此一戦ニ討死ス、

というもので、興味深いのは、引間城の飯尾連龍の謀反も、この武田信玄から誘われた堀越氏延が声をかけたからであるとしている点である。堀越氏延の謀反は武田信玄からの働きかけによるものであることは十分考えられるが、飯尾連龍についてはどうだろうか。この点については後にくわしく検討することによつて。

なお、堀越氏延の謀反を、『武徳編年集成』・『朝野舊聞叢書』<sup>(9)</sup>はともに永禄五年（一五六二）とするが、『今川家譜』は永禄六年としており、先に述べた通り、「成瀬文書」の「去々年以來遠州念劇」の去々年というのが永禄六年にあたることからしても、一連の動揺は永禄六年に始まるとみてよいように思われる。

- 註(1) 「天宮神社文書」（『静岡県史料』第四輯、六九八ページ）。
- (2) 「富士家文書」（『静岡県史料』第二輯、二二〇ページ）。
- (3) 「記録御用所本古文書所収文書」（『静岡市史』中世近世史料二、四九九ページ）。
- (4) 「尾上文書」（『静岡県史料』第四輯、七九〇ページ）。
- (5) 小沢舜次『犬居城主天野氏と戦国史』付録。
- (6) 拙稿「戦国期の遠江今川氏〔堀越氏〕」（『駿河の今川氏』第九集）。
- (7) 『続群書類従』第二十一輯上、一五八ページ。
- (8) 『武徳編年集成』永禄五年六月二日条。名著出版刊本上巻、七二ページ。
- (9) 『朝野舊聞叢書』東照宮御事蹟第二十四所収「貞享菅沼主水書上」。汲古書院刊本2、四九八ページ。

## 二、引間城主飯尾氏の謀反

永禄五年の井伊氏、同六年の天野氏・堀越氏・飯尾氏など、今川氏の支城主たちの相つゞ離反の中で、今川氏にとって、やはり一番こたえたのは引間城主飯尾氏の離反であつたらう。まさに、「遠州念劇」の象徴的な出来事だつたと思われる。



それは永祿九年閏八月六日付東漸寺日亮宛今川氏真判物に、「去子年四月八日、飯尾與松平藏人令「対面」砌……」と出てくることによって明らかであり、「去子年」というのは永祿七年（一五六四）のことなので、永祿七年四月八日に、家康と連龍との会見があったことがわかる。そのころから連龍は家康に急接近していたものであろう。連龍にしてみれば、一度叛いた以上、氏真が本心から自分を許してくれるとは考えていなかったであらうし、そのころになれば、家康の力もかなり強大化していたのである。

具体的に、連龍が再度、氏真に対して弓を引いたのは同年五月に入ってからであった。『朝野舊聞叢書』は、「貞享（紀伊殿家臣）江馬源右衛門書上」を引いているが、それには、

永祿七年、氏真參州出張之時、遠州浜松城主飯尾豊前守も相隨て在陣仕候、曾祖父江馬加賀守異見により権現御味方に志し、則加賀守を使として岡崎へ奉り、此旨を言上仕候。於「一味」は早々吉田表を引込み、浜松江可帰之旨被仰二付、豊前守夜中に新居・白須賀を放火して本坂道を浜松江引取候、依之、今川方周章し、翌朝吉田表を引込み、浜松を通して本坂より大菩薩通を引帰、其後今川方より浜松城を為「可」攻人数五千餘出張之處、浜松より鷺坂伊賀守に人数三百計着添、天龍川辺江出向ひ、堤を隔て、セリ合敵兵多討取候、今川方より飯尾長門守を以重而浜松城を攻る刻、権現様より為加勢本田百助・渡辺平蔵・中根左藏以下三十騎被遣（援兵を遣はされしとあるハ倍しかたし）、城兵相共に浜松の向宿上松迄出向候、敵跡を取切及「一戦」、鷺坂伊賀守致「討死」、味方危く相見候處、小笠原新九郎、馬伏家より出て横鎗を入切崩、敵將長門守を小野田彦右衛門請取奉る人数を引取、此節今川方より嚮を入、其後豊前守を駿府へ謀寄主従八十四人生「害之」とみえている。この「貞享書上」には、連龍が氏真に離反し、三河の吉

田表から引き退いたのをただ永祿七年とするが、ほぼ同文の「家譜」では、永祿七年五月のこととしている。おそらく、四月八日に家康と会って謀反の決心を固めた連龍が、五月になって行動に移したものである。このときも、氏真と連龍の対決は、決定的な事態を迎える前に和睦におよんでいる。「貞享書上」では、ただ「今川方より嚮を入」とあるだけであるが、その具体的な内容は、「浜松御在城記」によってうかがうことができる。

つまり、氏真は、連龍にとって姉婿にあたる「侯城主の松井左衛門に幹旋を依頼し、松井左衛門が仲介役となつて二人が講和を結び連龍を駿河へ呼び寄せたことが明らかとなる。

さて、この松井左衛門であるが、「浜松御在城記」では、「初強八と申候哉」としている。強八、すなわち郷八郎（五郎八郎）と解釈している。しかし、郷八郎は、のち左衛門尉を称しているが、永祿三年の桶狭間の戦いで討死した松井宗信のこと、したがって、この松井左衛門は、左衛門尉宗信の子、山城守宗恒でなければならない。

それはさておき、氏真は、永祿八年十二月二十日、連龍を駿府に呼び寄せ、駿府の飯尾邸を囲んで連龍を謀殺している。「浜松御在城記」は、「永祿八年極月廿日、駿府一ノ丸飯尾屋敷江押詰、被誅之」と記し、『武徳編年集成』になると、もう少し詳細に描写している。すなわち、同年十二月二十日の条に、

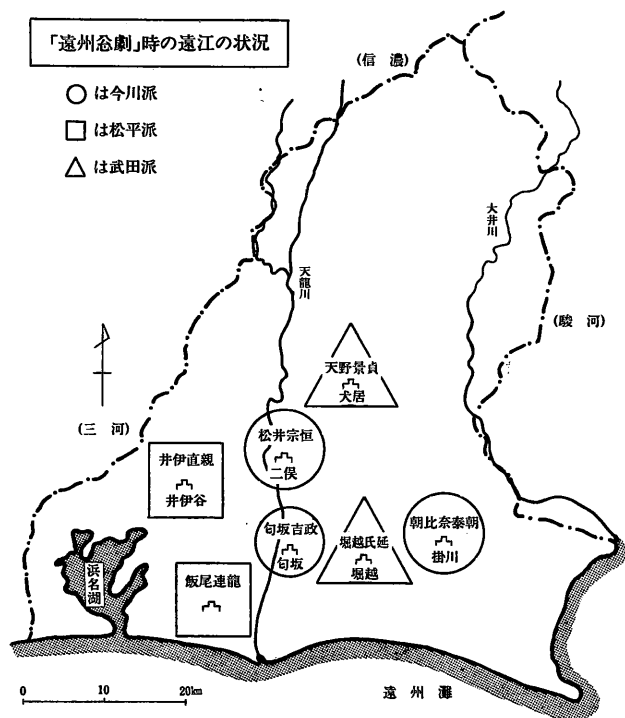
○廿日遠州敷智郡引間ノ飯尾豊前守致実ガ姪女今川氏真ガ龍ヲ得テ頃年致実モ殊遇ヲ蒙リシガ、神君二内応ノ由風説シ、氏真衆を駿府ニ召寄せ軍士百騎許ヲ以テ其屋鋪ヲ圍ミ攻テ變ニス、時二飯尾ガ士三十騎死戦ヲナス故、寄手多ク討タル、致実ガ室無雙ノ強力屢々奪ヒ戦フ（是ヲ駿府ノ小路、其臣岡江馬氏引間ノ城ヲ守リ神君二心ヲ通ストイヘ今川ガ多勢来テ城郭ヲ攻撃故、一旦ノ禍ヲ避テ妻子ヲ質トシ寄手ニ降ル軍下世ニ称ス）

ト云々、

とあり、連龍の妻らが防戦したことがわかる。飯尾氏の駿府屋敷がここにあったかはわからないが、今川館のすぐ近くにあったものであろう。

こうして、「遠州念劇」の最大場面ともいえるべき飯尾連龍の謀反は、連龍の死によって幕を閉じることになる。しかし、それはあくまで第一幕が閉じられただけであって、氏真は引間領を完全に恢復できたわけではなかった。

これまでの経過を地図上にあらわすとつぎの図のようになり、かなり大がかりな動揺があったことが明らかとなる。



註(1)

飯尾連龍の謀反が、今川氏真にとって、一連のできごとを自ら「遠州念劇」と表現せざるをえないような決定的な要因となったことは、永禄十年(一五六七)八月五日付で、氏真が鈴木三郎太夫重時・近藤石見守康用に与えた判物において「飯尾豊前最前逆心之砌、遠・三念劇所……」と表現していることによっても明らかである(『譜牒餘録』所収文書『新編岡崎市史』史料古代中世六、一一三二ページ)。

(2) 『蒲神明宮文書』(『静岡県史料』第五輯、八四二ページ)。

(3) 『頭陀寺文書』(『静岡県史料』第五輯、七〇八ページ)。

(4) 頭陀寺城に飯尾連龍をはじめ、飯尾土佐、江間弥七ら引間城兵が籠城したことは、永禄七年三月五日付都筑惣左衛門尉秀綱宛今川氏真の判物によって明らかである(『都筑家文書』『新編岡崎市史』史料古代中世六、一〇五四ページ)。

(5) 後述するが、『朝野舊聞稟葉』に引く「貞享<sup>〔松平定直〕</sup>書上」に、氏真が永禄七年(一五六四)三河攻めに出張したとき、飯尾連龍もこれに従軍していることを記していることにより明らかである。

(6) 連歌師宗長の「宗長手記」上に、「浜松庄<sup>〔吉良義隆〕</sup>奉行大河内備中守、堀江下野守にくみしてうせぬ。其刻、飯尾善四郎賢連、吉良より申下され、しばらく奉行とす。すべて此父善左衛門尉長連、義忠入部の時に、当庄の奉行として、度々の戦忠、異他なり。剩義忠帰国の途中にして凶事。名譽の防矢数射尽し、則討死。其息善左衛門賢連、其子善四郎乗連、伯父善六郎為清まで、其旧号をわすれたまはず。」とある(『宗長日記』〔岩波文庫版〕『八〇九ページ)。

(7) 大塚克美編『浜松の歴史』「今川氏と浜松地方」一八五ページ。

- (8) 『宗長日記』一四ページ。  
 (9) 松平元康は永祿六年七月に家康と改名していた。  
 (10) 『東漸寺文書』(『静岡県史料』第五輯、七八六ページ)。  
 (11) 『朝野舊聞哀纂』2、八〇三―八〇四ページ。  
 (12) 『浜松御在城記』では、三河の一ノ宮より人数を引いたとして  
 いる。  
 (13) 『南紀徳川史』第六冊「名臣伝」所収。  
 (14) 山本大・小和田哲男編『戦国大名家臣団事典』東国編、三四六  
 ページ。  
 (15) 『武徳編年集成』上巻、一〇四ページ。  
 (16) 引間城領については、前掲註(7)書、一九二―一九二ページ参照。

### 三、家康と結ぶ引間城の江馬氏

引間城の留守を守っていたのは飯尾連龍の家老江馬安芸守と同加賀守であった。連龍は、氏真から呼び出しをうけたとき、危惧を感じていたのであろう。「万一のことがあったら家康と結べ」と指示していたようである。『朝野舊聞哀纂』は、永祿八年(一五六五)十二月晦日のこととして、「晦日、飯尾豊前守致実か遣臣江馬安芸守・同加賀守は引馬城を守り、先に致実か命する旨あるにより、此よし使して公に告奉る。依て酒井左衛門尉忠次・石川内記頼正より起請文を贈る。」と綱文をたて、前掲「貞享<sup>江馬安芸守</sup>書上」の続きを載せる。すなわち、

元来、和議疑敷存故、駿府<sup>江</sup>参る刻、若我不慮之義有<sup>レ</sup>之者、浜松城<sup>江</sup>を権現様<sup>江</sup>差上、可<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>頼由家老江馬安芸守<sup>自注加賀守</sup>・同加賀守に申含候、依<sup>レ</sup>之加賀守方より以<sup>二</sup>飛札<sup>一</sup>岡崎<sup>江</sup>右之趣致<sup>二</sup>言上<sup>一</sup>候、江

馬安芸守・同加賀守<sup>江</sup>浜松城を守り、旧主之仇を可<sup>レ</sup>報旨相謀處、安芸守ハ甲州方<sup>江</sup>志し、加賀守ハ偏に岡崎御味方可<sup>レ</sup>仕と相談未決之處、加賀守家老川口郷左衛門を使として岡崎<sup>江</sup>差上、酒井左衛門尉・石川内記を以、右之趣致<sup>二</sup>言上<sup>一</sup>奉<sup>レ</sup>頼時、酒井・石川兩人より連判起請文差越、

というもので、連龍より、「不慮之義有<sup>レ</sup>之者、浜松城を権現様<sup>江</sup>差上」るよう、両家老に言い置いていったことがわかる。これで見ると、連龍はすでに家康と結んでいたことが確実である。

しかし、江馬安芸守・同加賀守の意思は全く同じではなかった。「貞享書上」で明らかのように、江馬安芸守の方は親武田派であり、加賀守の方が親松平派で、連龍の「遺言」を根拠にした加賀守の主張が通り、結局、加賀守の重臣川口郷左衛門を使として家康のもとに起請文を提出したのである。

それに対し、酒井忠次・石川頼正が連署して起請文の返書をよこしている。「貞享書上」によれば、

敬白起請文御返答之書

- 一 被<sup>二</sup>仰越<sup>一</sup>候時、聊相違有間敷事、
- 一 加勢異儀有間敷事、

一 御知行方不沙汰有間敷事、

右之條々於相違者、

上ハ梵天帝釋四大天王惣而日本国中大小之神祇別<sup>而</sup>伊豆箱根両所権現之蒙<sup>二</sup>御討<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>現世<sup>一</sup>白癩黒癩可<sup>レ</sup>成者也、仍如<sup>レ</sup>件、

永祿八乙丑年

酒井左衛門

極月晦日

忠次血判

石川 内記

頼正血判



江安

同加

御返報

とあり、「名臣伝」<sup>(3)</sup>所収の江馬與右衛門秀次の家譜に所収されている起請文とは、若干のちがいがみられるだけである。

その後、翌永祿九年正月六日には、江馬安基守・加賀守に家康の家臣渡辺庄衛門勢よりの起請文が提出され、二月十日には家康自身の起請文も送られ、加賀守には同日付で家康からの知行宛行状も与えられているのである。

しかし、起請文で「必ず加勢を送る」といつていたにもかかわらず、家康の方でも遠江にまで力をさくことができなかったとみえ、結局、加勢を送ることが不可能であった。そのため、永祿九年二月から四月にかけて、また今川氏の大軍が引間城を攻め、ついに江馬安基守・加賀守は氏真に降り、和睦しているのである。

この経過をみて気がつくのは、今川氏が、結局のところ、自力では引間城という一つの支城を落とすことができなかったという事実である。国人級武士の謀反を鎮圧できないということは、それだけ戦国大名今川氏の弱体ぶりを世間にさらすことになった。

その後、たしかに引間城は今川氏が真轉支配し、城の塀などの修理が行われたりしているが、「遠州念劇」を鎮圧できず、かえってそれを長びかせてしまったことは、今川家臣団の解体、ひいては戦国大名今川氏の滅亡を早める契機になってしまったといつてよいであろう。

註(1) 『朝野舊聞哀纂』2、八〇五ページ。

(2) 同右。

(3) 同右、八〇六ページ。

(4) 『南紀徳川史』第六冊、一五二―二〇二ページ。最後の部分が「伊

豆箱根両所権現富士白山天満大自在天神之豪」御討」……」と  
なっている。

(5) 拙稿「徳川頼宣に仕えた今川氏の遺臣」(『駿河の今川氏』第七集、一七五―一七七ページ)。

(6) 大塚克美編『浜松の歴史』「今川氏と浜松地方」(坪井俊二執筆)、二〇七ページ。

(7) 拙稿「戦国大名今川氏の築城人夫役について」(『静岡大学教育学部研究報告(人文社会科学篇)』第三十五号)。

## おわりに

永祿九年(一五六六)のはじめ、家康が引間城に加勢を送らなかったのはなぜであろうか。三河は征圧したが、その余勢をかって遠江に攻め入ることをしなかったのはなぜであろうか。最後にこの問題を検討しておこう。

結論的にいってしまえば、私は、家康がわざと遠江への進出をさしひかえていたのだと考えている。というのは、「遠州念劇」のあった永祿六年(一五六三)から九年までの時期、今川氏真と武田信玄の仲は、同盟者の関係であった。すなわち、義元・信玄・氏康の代に結ばれた「甲相駿三国同盟」がまだ生きていたのである。しかも、その時期、家康の同盟者信長は、信玄と同盟をむすんでいた。つまり家康は、自分の同盟者である信長の同盟者信玄のその同盟者である氏真を攻めるわけにはいかないという事情があったものと考えられる。

その足枷がはずれたのは、信玄と氏真の対立がはじまった永祿十年(一五六七)からで、決定的だったのは、永祿十一年の信玄との間に

結ばれた、今川領国の駿遠分割領有の密約である。

信玄が今川氏の本拠地駿府を攻めて氏真を逐ったまさにその日、永祿十一年十二月十三日、家康も井伊谷三人衆といわれる菅沼忠久・近藤康用・鈴木重時に道案内をさせ、遠江に攻め入っているのである。